AAFC 分科会　　2020.1.26　塚田

ハイドンの楽しみ　第3回

1 本日の曲目

交響曲第 26 番 「ラメンタチオーネ」 より
交響曲第 44 番 「悲しみ」 より
交響曲第 47 番　より
交響曲第 48 番 「マリア・テレジア」 より
交響曲第 49 番 「ラ・パッシオーネ」 より
弦楽四重奏曲作品 20「太陽」第 5 番
ピアノソナタ第 32 番ト短調　Hob44　より
ピアノソナタ第 33 番ハ短調　Hob20　より
交響曲第 96 番 「奇蹟」

2　楽長ハイドン

1766 年エスターハージ家の楽長ヴェルナーが死去、ハイドンが 34 歳で楽長に昇進しました。ヴェルナーが担当していた宗教音楽も、劇場のための音楽、企画もやることになり、一層多忙な日々を送ることになりました。一方このころから、ハイドンの作風に変化があらわれ、短調の多用、深い感情表現などが目立つようになりました。この時期をハイドンの「シュトルムウントドランク（疾風怒濤）」の時代と言われています。交響曲は、1766 年から 1770 年までに 10 曲、1771 年から 1773 年までに 11 曲書かれましたが、このうち短調の作品は 6 曲あります。

3　シュトルムウントドランク（疾風怒濤）

もともとはドイツ文学における変革運動で、啓蒙主義による理性の優越に対し、個人の主観、特に自由な感情表現を目指したものと言われています。代表作はゲーテの「若いウェルテルの悩み」など。音楽の分野では、グルックのオペラなど劇音楽から、バッハの息子たちの管弦楽曲がこの傾向を表すものとみなされています。モーツァルトでは 17 歳の作品交響曲第 25 番ト短調 K183 が代表。
ハイドンの場合、シュトルムウントドランクの運動に直接影響されたというより、劇音楽での表現傾向を認識しつつ、作曲家ハイドンの音楽表現の広がりと深まりを増した一環であると捉えられています。

- モーツァルト交響曲第 25 番ト短調(1773 年)第 1 楽章より
- ハイドン交響曲第 39 番ト短調（1765 年）第 4 楽章より

4　交響曲第 26 番ニ短調 「ラメンタチオーネ（哀歌）」（1768 年）

第 1 楽章　アレグロ・アッサイ・コン・スピリト　　4:56

交響曲第 49 番ヘ短調 「ラ・パッシオーネ（受難）」（1768 年）

第 4 楽章　プレスト　　2:48

フランス・ブリュッヘン指揮オーケストラ・オブ・ジ・エイジ・オブ・エンライトンメント （Ph）

第 26 番は 3 楽章のみで、復活祭前の受難週に関する音楽を引用、第 49 番も同じころの作曲で教会で続けて演奏されたのではないかといわれています。

5 **クラヴィアソナタ ト短調 Hob.XVI.44** (1771 年頃)(第 32 番)

第 1 楽章　モデラート　　9:54

スヴァトスラフ・リヒテル(ピアノ) （Dec）

2 楽章からなるが、変奏曲風の長い抒情的な第 1 楽章が印象的。

6 **交響曲第 44 番ホ短調 「悲しみ」** （1771年）

第 3 楽章　アダージョ　　6:22

トレヴァー・ピノック指揮イングリッシュ・コンサート （Arch）

この楽章はハイドン自身も気に入っていて、自分の葬儀に演奏してほしいと希望していました。

7 **交響曲第 48 番ハ長調 「マリア・テレジア」** （1769 年）

第 1 楽章　アレグロ　　8:09

マックス・ゴバーマン指揮ウィーン国立歌劇場管弦楽団 （Sony）

タイトルは、1773 年 9 月に、オーストリアのマリア・テレジア女帝がエステルハーザへの訪問の際演奏された曲と考えられたことによります(最近では、この曲はそれ以前に作曲され、実際の訪問時に演奏されたのは、第 50 番と言われています)。

8 **クラヴィアソナタ　ハ短調 Hob.XVI.20** （1771 年頃）（第 33 番）

第 1 楽章　モデラート　　7:23

第 3 楽章　アレグロ　　3:21

アンドレアス・シュタイアー(ハンマーフリューゲル)　(DHM)

音域が広がり、強弱記号も付けられるようになりました

。

9 **交響曲第 47 番ト長調** （1772 年）

第 3 楽章　メヌエット　　2:52

クリストファー・ホグウッド指揮アカデミー・オブ・エンシェント・ミュージック （オワゾリール）

第 3 楽章は逆行メヌエットと呼ばれ、前半につづく後半部分は前半の旋律を逆から演奏するように指示されています。すなわち、ハイドンのメヌエットは通常次のような構成になっています。(M はメヌエット、T はトリオでいずれも 8 小節からなる)

M 前半⇒M 前半繰返し⇒M 後半⇒M 後半繰返し⇒T 前半⇒T 前半繰返し⇒T 後半⇒T 後半繰返し⇒(ダカーポ)M 前半⇒M 後半

通常は、「M 後半」や「T 後半」は前半と違った旋律が出てきます。この 47 番では、後半部分は前半部分を逆向きに演奏するように指示されています。
旋律そのものは目立たないものですが、（やや不自然な）強弱記号が付いたりして、逆行に気が付きやすいようにも工夫されています。添付の楽譜をご覧ください。

10　弦楽四重奏曲作品 20 第 5 番　ヘ短調　Hob.Ⅲ.35（1772 年）

第 1 楽章　アレグロ・モデラート　7:19
第 2 楽章　メヌエット　5:04
第 3 楽章　アダージョ　5:16
第 4 楽章　フィナーレ　フーガ・ア・2ソゲッティ　2:47
エマーソン四重奏団　（DG）

作品 20 の弦楽四重奏曲は 6 曲からなり、のちアムステルダムで出版された時に太陽の表紙絵が印刷されたことから「太陽四重奏曲」と呼ばれるようになりました。このうち第 5 番ヘ短調は特に抒情的で美しいといわれています。

11　交響曲第 96 番　ニ長調 「奇蹟」

1791－92 年の第 1 回ロンドン旅行に際して現地で作曲され初演されました。「奇蹟」という呼び名の由来は；

ハイドンがオーケストラの前に姿を現わし、みずからの交響曲を指揮しようとしたとき、物見だかい聴衆が有名なハイドンをもっとよく間近に見ようと、平土間の席を離れオーケストラに向かって殺到した。そこで平土間の席があいた。ちょうどそのとき大きなシャンデリアが落ちてきて粉々に砕け、居合わせた大ぜいの人々を大混乱に陥れた。恐怖の一瞬が過ぎると、前方に集まっていた人々は、自分たちが幸運にも危険を免れることが出来たのをしり、数人の者たちが大声で叫んだ。「奇蹟だ、奇蹟だ！」

第 1 楽章　アダージョーアレグロ　7:15
第 2 楽章　アンダンテ　5:52
第 3 楽章　メヌエット　5:23
第 4 楽章　フィナーレ（ヴィヴァーチェ・アッサイ）　3:40
アンタル・ドラティ指揮フィルハルモニア・フンガリカ　（Dec）

＊メヌエットの中間部（トリオ）にはいかにもハイドンらしい気持ちの良いオーボエソロがあります。どのように吹かれているかいくつかの演奏を比較してみたいと思います。

セルーカラヤンーバーンスタインーヨッフムーアーノンクールーホグウッドーミンコフスキー